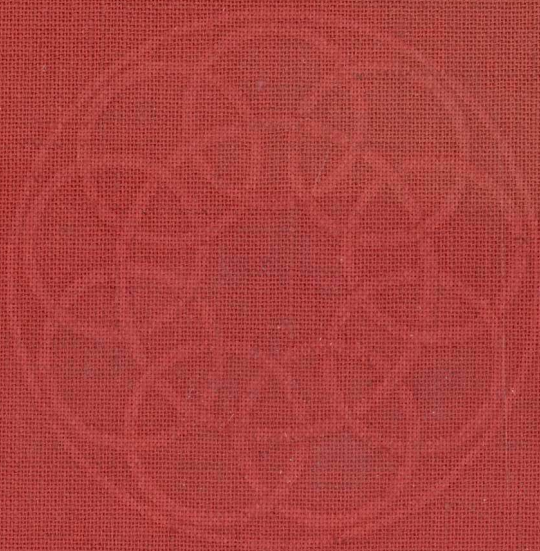


日本文學史

近代・現代篇

トナリト・キ
徳岡孝夫訳



ドナルド・キーン
徳岡孝夫訳

日本文學史

近代・現代篇 一

日本文学史 近代・現代篇 一

© 1984 定価 1950 円

昭和 59 年 2 月 15 日印刷

昭和 59 年 2 月 25 日発行

著 者 ドナルド・キーン

訳 者 徳岡孝夫

発行者 高梨 茂

印 刷 三 陽 社

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替 東京 2-34

検印廃止

ISBN 4 - 12 - 001273 - 5

目次

序	近代・現代の日本文学	5
一	文明開化	17
二	明治の漢詩文	51
三	翻訳の時代	81
四	明治政治小説	113
五	坪内逍遙と二葉亭四迷	146

六 硯友社

七 北村透谷とロマン派

八 幸田露伴

九 樋口一葉

一〇 泉鏡花

訳者あとがき

182

228

254

275

304

340

日本文学史

近代・現代篇一

序 近代・現代の日本文学

日本の近代は、一般に、一八六八年の明治維新が出発点とされている。それに先立ち、新しい天皇に忠誠を誓う尊皇派が幕藩体制と争い、五百年以上も断絶していた天皇親政の復活と、一八五三年（嘉永六年）のペリー来航により開国した日本を訪れる異人たちの撃攘を強行しようとした時期があった。官軍は勝ち、明治元年旧十月には、明治天皇は、八世紀以来ほぼ一貫して王城の地であった京都を去って鳳駕を江戸に移し、江戸城を皇居とし、江戸は東京と改められた。

若い天皇が「明らかなまつりごと」を元号に選んだ元年の旧三月、天皇は五箇条の御誓文を発し、旧来の陋習を破り、知識を世界に求めて万民保全の道を立てんと誓った。それまでの攘夷の声はたちまち鎮まり、まもなく欧米からの影響は怒濤のように日本に流入し始めた。

電信機械を操作したり、鉄道や印刷機械の動かしかたに関する知識を会得するのは、日本人にとって比較的やすかったが、外国語を習って外国文学を鑑賞し翻訳するのは、大事業だった。諸外国へ送り出された日本の留学生は、化学、農学、公衆衛生学等々、政府が差し当たっての実

益ありと考えた分野の学問のみに専心した。偶然に助けられないかぎりには、外国文学に目を向けることはなかった。

適当な教科書がないため、偶然、文学作品から英語、あるいはドイツ語、フランス語を学んだり、帰国時に現地の友人からもらった餞別がたまたま一冊の小説であったり、彼らと欧米文学との出会いは、そうした偶然に左右されていた。初期の翻訳はでたらめで、今日では原書のほうが完全に忘れられたような作品に取り組んだ例が珍しくない。だが、翻訳がなければ、新しい日本文学がいち早く芽生え花開くのは、不可能だったことであろう。

明治維新時の日本文学は、折からその最干潮に当たっていた。小説を発表中の作家は数人にすぎず、しかも後世に残るような質のものではなかった。歌人は、数こそ多かったが、今日では和歌の研究者でさえ、当時の歌を一首だに覚えてはいないだろう。文学の中でひとり隆盛を誇っていたのは歌舞伎脚本で、それも一にかかって河竹默阿彌に負うところが大きい。二百年以上もの間、鎖国により政權の安定をはかった徳川幕府の政策により、ヨーロッパや中国からの文学作品の流入はほとんどなく、国内の才能も完全に掘り尽くされた感があった。日本人の模倣癖は、よく椰櫨の対象になるが、幕末の日本文学は海外の文学を模倣する機会を失ったがために、日本のそとではほとんど理解さえできぬものになり果て、日本という島国に住む大家族の中でだけ通用する身内のジョーク同然になっていた。

たとえ欧米の文学が日本に紹介されなくても、日本人は文学以外の面での西欧との接触を通じ、

結果的にはみずからの力で古くなった文学に活力を注ぎ、あるいは真に日本的な新文学の発展をなし得たかもしれない。幕末の思想家の中には、欧米の科学技術を学ぶのはいいが東洋的道德を捨てるなど主張する人が実際にいたし、欧米へ送り出される若い留学生にも、西洋文明の宗教的、哲学的方面には感化されることが望まれた。だが、欧米やその諸言語への知識が増えるにつれ、西洋文明の実学的な部分だけを輸入することの不可能は、ようやく日本人の目にも明らかになっていった。

日本と欧米のいいところだけを結合する「和魂洋才」の旗印は、繰り返し用いられたが、実際には両者の悪い面だけを併せもつ方向に進みがちだった。明治初期の錦絵などはその一例で、舶来の顔料を用いた毒々しい紫、緑、紅などを多用し、題材も徳川末期の絵師の病的な想像力を受け継いだ、どぎついものが好まれた。そのような絵も、それなりに面白く、錦絵に描かれたシルクハット姿や長いスカートの裾を引いた日本人男女の風俗は、新時代を代表するものとして珍重に足るが、日本の木版画藝術の最高の作品とは比べるまでもない。

明治初期の文学も、錦絵と同じように、西洋のごく普通の事物がさも珍しいものとして書かれた部分など、欧米人の興味をそそらずにはおかない。一八七三年（明治六年）にキリスト教禁制が解かれて以来、日本の青年が真正直にキリスト教に惹かれていった真率さには一種の感動を禁じ得ないし、明治十年代の政治小説も、素朴すぎる点を除けば、その理想主義は読む者の心に触れる。しかし、以上すべてにも増し、欧米の文学に触れた結果、日本の近代文学に明確な影響と

なつて表われたのは「恋愛」の発見であつた。

言うまでもないが、明治以前の日本人も、文学の中に男女の愛の喜びや悲しみを書いてきた。

有名な例は近松の「心中物」で、そこに登場する人物は恋の成らないのを知ると、手を取り合つて死ぬほど、強い愛に結ばれていた。だが、近松の男たちは「女」を恋することはあつても、彼女たちを女神やミューズのように崇めることは知らなかった。明治の文学に繰り返し扱われるプラトニックな男女関係は、思いも及ばないことだったのである。

恋愛と並んで、欧米の文学がはじめてもたらしたものに「個」の発見がある。他人との優劣はともかく、自分は他とは異なる存在であるというJ・J・ルソーの孤立した個の觀念は、一般に読者大衆は自分よりはるか下と信じて疑わなかつた明治以前の日本の作家なら、とうてい受け入れない思想であつた。

明治に入つてはじめて、日本人は個の主張のためには小説の中に自己の特殊性を解剖し、親友にさえ打ち明けない秘密を敢て書くようになった。やがて「私小説」と呼ばれるようになる自伝的文学は、もともと浪漫的な個の発見から出たものだが、何世紀間も日本の散文文学の材料になつてきた特殊な人物による異常な行為とは異なり、普通の人間による普通の生活を自然主義的に描く方向へと進んでいった。西洋の自然主義は浪漫主義への反動だったが、日本では欧米での長い間の文学的展開が、ときには僅々十年間に圧縮され、用いられた結果、一つの作品の中に自然主義と浪漫主義が併存するという現象さえ起つた。

批判のみ多く支持されることの少ない私小説だが、それでもなお日本の近代文学の中に確固たる地位を占め得たのは、一つには自我を発見した作者が、私小説によって自己表現を満足させたからであらうし、読者もまた、単なる話の語り手としての作者だけでなく、作者の「人間」そのものに興味を抱いたからだろう。日本文学に古くからある随筆の伝統も、私小説の一分流としての心境小説の発展を助けた。これは、欧米の影響が比較的少なかった分野である。

明治以降の作家の多くは、欧米の作品の翻訳を読むことによって、はじめて文学に目を開かれた。明治維新からの百年間に日本で行われた翻訳は、歴大な量に上る。すでに指摘されたことだが、もしここに自国語しか読めない人がいれば、世界の文学を最も広く読めるのは日本人だろうという。それが厳密に事実かどうかはともかく、少なくとも英語国民は、日本語で紹介される外国文学の豊富さに、羨望を感じずにはいられない。しかも英語圏では、プルーストやマンの訳は、一度出ればほぼそれきりだが、日本では何度も繰り返し翻訳されることが珍しくない。

日本人の読書量の中に翻訳が占める比率も、おそらく他のどの国民より高いが、かといって、それは日本独自の伝統の放棄を意味しない。むしろ逆に、日本の文学は、明治初頭から何度も、日本的伝統への「回帰」を示したし、個々の作家についても、はじめは欧米の文学や文明全般に陶醉しながら、やがて同じような回帰を演じ、和魂洋才まではいかなくとも、東と西が自己の内面で不可分の結合を果たしたという認識に達した人が少なくない。

申すまでもなく、日本の近代文学も、読者なくしては隆盛を望めるはずがない。

明治初期の日本では、男の約半数、女の八五パーセントが文盲だったと推定されるが、新政府が教育に大いに意を用いた結果、この数字は急速に減少し、日本はその国語書写法の複雑さにもかかわらず、まもなく世界有数の国民識字率を誇るようになった。

日本人は文学に対し古来敬意を払ってきたし、その伝統は今日もお健在である。一般の文学愛好者向け雑誌から和歌や俳句の専門誌に至るまで、無数の文学雑誌があり、何千人という文学者の生計に貢献している。他の面では読者の好みに応えるのに不熱心に見える新聞までが、申し合わせたように文藝欄を設け、日ごと連載小説を載せている。

文学への関心の深さは、明治人の生活を書いた多くの作品が、証明するところである。貸本屋は、本を背負って学生の下宿を巡り、二葉亭四迷や森鷗外のような謹厳な作家でさえ、青年期には貸本屋から江戸時代の戯作類^{げさく}を借りて耽読したと回顧している。

本を借りるだけでなく買うことのできる階級は、そのころ洋書の主な取次店である丸善に通った。一九一一年（明治四十四年）の石川啄木は、苦勞して買った本を読むより先に質に入れなければならぬ生活の中で、いつの日か丸善から新刊書を「四五日おきに送り来る」しあわせな日が来るのを空想した。公立図書館は維新後の産物で、はじめ東京・湯島の昌平齋^{しやうへいさう}に設けられ、一八八五年（明治十八年）上野公園に移ったものが最も充実していた。混雑する閲覧室に足繁く通った人の中には、幸田露伴、樋口一葉、田山花袋らがいる。

明治に入っても、なおかなりの間、ほとんどの本は、数百年前からだれも実際の会話に用いな

い文語体で書かれた。口語ほど理解しやすくないが、独特の威厳と文韻があり、文盲の者でも朗読を聞けば文語ならではの美がわかる。幕末の大衆向け戯作小説には、すでに口語体が使われ、とくに小説の会話や歌舞伎脚本のセリフは口語化していたが、自己の筆力を持つ作家たちが、千年以上も前から使われた文語体を放棄するのは、容易なわざではなかった。小説家が口語体を地の文にも拡張、小説全体に及ぼすようになるのは、明治も二十年代、小説作法がはじめて真剣に模索されたすえ、二葉亭四迷以下が実行に移してからだった。

一八八七年（明治二十年）、雑誌に発表され始めた二葉亭の『浮雲』は、言文一致がみごとに成功した例だが、多くの作家はなお彼に続くのを躊躇した。当時は、まだ標準語が確立せず、口語体は日常会話には便利でも、読者が文学的表現に期待する豊かなニュアンスには欠けるものがあった。小説家がや々と文語体と訣別するのは、二十世紀に入ってからで、それでもなお詩歌の作家たちは、簡潔と古歌への連想に富む文語を愛用し、今日に至っている。

日本の近代文学にとり、おそらく最も劇的な変化が起ったのは、日清戦争（一八九四～九五年）であろう。日本の産業発展を助けたこと以外には半ば意義の忘れられた戦争だが、文学史的立場から重要なのは、中国との交渉開始以来、日本の最高の教養人が尊崇して止まなかった中国文明の優越性を、日本人がはじめて疑い、あるいは否定さえしたことである。

中国軍隊の脆さや、捕虜になって恥じない中国兵の態度が、愛国心旺盛な日本人に中国への軽侮の念を抱かせたのはいわば自然だが、日清戦争はもっと深い意味で、日本人全体に影響を持っ

た。数カ月のうちに、日本人の多くが、長年の師である中国を追い越してしまった日本に気づいたのである。

戦争を歌った詩の多くは、士族階級の伝統に基き漢詩で書かれたが、漢詩文は戦後たちまち日本人の教養の中心から^{すべ}り、日本語の古風な変型にすぎない地位にまで^{おとし}貶められた。日清戦争後に教育を受けた日本人は、一般に、それ以前の教養人のような自然さでは漢詩文が書けなくなり、四書五経に基く語彙は、学者の書くものからさえ、徐々にその姿を消していった。

漢詩文を遠ざけはしたが、日本人は英語その他のヨーロッパ言語に切り換えたわけでもなかった。国立大学では、最初お雇い外人も日本人も英語で講義したが、やがてそれは日本語に変わった。日清戦争を契機とするナショナルリズムの昂揚は、まもなく鎮まり、教育用語の日本語への転換は、日本人の外国語会話力には有害だったかもしれないが、日本文学の研究と鑑賞を進める点では功があった。まもなく日露戦争（一九〇四～〇五年）では、日本は勝ったものの大きい犠牲を強いられ、それは幻滅と厭世思想を生んだ。いわゆる日本主義が再び盛り返すのは一九三〇年代で、それが一九四五年（昭和二十年）の敗戦とともに終わるのは周知のとおりである。

日露戦争後の十年は、日本人が国際社会で日本の果たすべき役割に確信を持ち得ず、一方では大逆事件（一九一〇～一一一一年）が示すように明治政府の抑圧的性格をめぐって不安が広まった時代で、山崎正和氏はその病的な状況を「不機嫌の時代」と呼んだが、これは文学的には非常な活動の時期であった。

森鷗外と夏目漱石という近代日本で最も尊敬される両作家が、その代表作の全部ないしは大部分を、この時代に発表した。近代日本文学的主流になる自然主義も、同じ時代に成長し開花した。一九四一年（昭和十六年）の太平洋戦争勃発より前に文壇に活躍する作家の大多数は、この時期に文学活動を開始した。新しい詩や戯曲の運動も、小説はど目立たない形ではあるが、同じころに始まった。

日露戦争後の文学史は、自然主義、白樺派、プロレタリア文学、新感覚派といったように、集団ごとに論じられる場合が多い。たとえば白樺派に属した人々は若い貴族で、トルストイのように高い理想を掲げ、農民、鉦山夫、その他の虐げられた人々の福利のために献身した。しかし、いかに立場が異なっても、ほとんどの派に共通なのは一種のコスモポリタニズムで、国境を超越する国際的イデオロギーや外国の作品、文学理論から直接影響を受けた点である。

白樺派における『白樺』のように、多くの場合、集団をつくった作家たちは同人の機関誌を出した。だが、個々の作家が世に認められるかどうかは、同人誌上の作品ではなく、総合雑誌に発表の場を得ることで決まった。たとえば若いころの谷崎潤一郎は、『中央公論』の編集者から原稿を請われたとき、自分がついに文壇に登場したのを知った。

総合雑誌の記事には政治的なものが多かったが、そこに掲載される文学は雑誌の政治的立場に影響されなかった。一九一九年（大正八年）の創刊以来、左寄りの立場をとった『改造』は、創刊号に幸田露伴の『運命』を載せたのははじめ、その後も志賀直哉『暗夜行路』、宮本百合子『伸

子』、芥川龍之介『河童』、堀辰雄『風立ちぬ』など、多彩かつ重要な文学作品を掲載した。この雑誌を出した改造社は、大正末から昭和初頭にかけて『現代日本文學全集』三十八卷（当初）を一冊一円で予約販売し、それが当たっていわゆる円本時代を現出、近代文学のために新しい読者層を開拓した。また、エブリマンス・ライブラリやドイツのレクラム文庫に做った一九二七年（昭和二年）創刊の岩波文庫も、日本やヨーロッパの古典普及に貢献した。

集団ごとに研究されることの多い近代文学だが、最も広く読まれた作家、最も重要な作家は、少数の例外を除けば、どの派にも属さなかった。永井荷風、谷崎潤一郎、芥川龍之介、川端康成、三島由紀夫らは、同人との結合よりも、むしろ截然と隔絶した作家として記憶されている。彼らの作品が二十世紀世界文学の中で独特のものになったのは、日本の文化遺産が他の国々のそれと非常に異なるだけでなく、彼らが東と西の感性をみごとに、ときには実に鮮やかな手法で、融合させたからにほかならない。

一九三〇年代のはじめに勃興した軍国主義は、それまでの数年間、とくに評論に猛威を振るったプロレタリア文学運動を、まず最初に弾圧した。作家は共產主義を棄てるよう強制され、なかには中国での戦争を美化する「積極的」文学を書く人も出た。「転向」と呼ばれるこの現象は、私小説風の自己告白小説を多数生む結果にもなった。対中戦争は太平洋戦争へと拡大し、多くの愛国的作品が書かれたが、今日も価値あるものはほとんどない。それに比べると、戦後に出た戦時回想の文学には、二十世紀の日本を代表し、世界のどの戦争文学とも比肩し得る作品がある。